

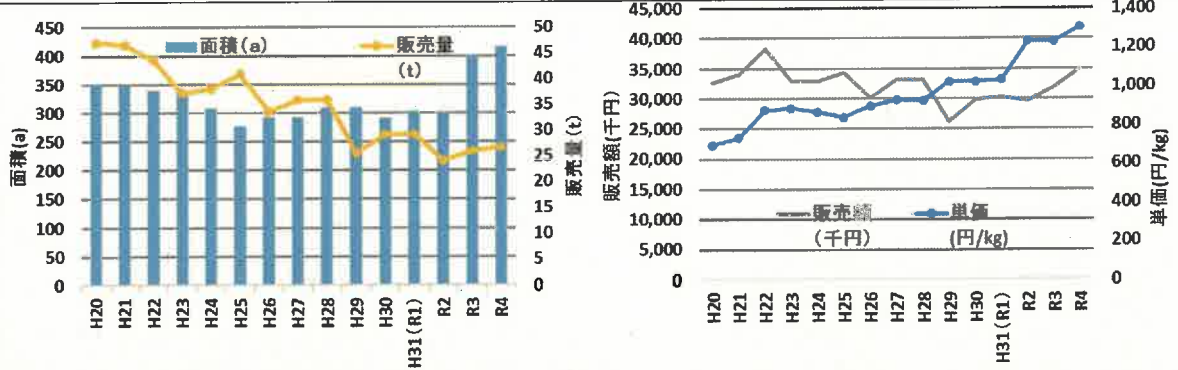
外部評価検討会 普及活動実績概要報告書

鳥取農業改良普及所

課題区分	特技課題（果樹）
課題名	国府ブドウ産地の再興 ～「4000万円アクションプラン」の策定・実行に向けた活動支援～ (2年目/3年計画)
普及対象	国府果実部ブドウ栽培者 29戸 【重点対象】 担い手ブドウ生産者：若手就農者4名、果実部役員3名、若手兼業農家6名、親元就農者1名、退職就農1名
普及活動の背景	<p>1 国府果実部ブドウ部は若手生産者（30～50代）とベテラン生産者が巨峰・ピオーネを中心に栽培する歴史ある産地である。ピーク時S57の13.5haからR元3.0haに減少した。しかしR2～3年度補助事業を機に国府果実部に部員4名が加わり、若手の雨除けハウスぶどう栽培者が増えた。果実部で規模拡大を推進し、R3年3月約1.0ha、R4年3月約0.14haを新植した。新植園は概ね雨除けのシャインマスカットであり、産地としても経験が浅く、規模拡大や新規参入の若手生産者は経営・栽培面で不安を抱えているため、基礎的な技術を研鑽する機会が必要である。</p> <p>2 温暖化で着色不安を抱える無加温ハウス盆前出荷の巨峰・ピオーネと、事業により大幅に増えるが着粒不安定な雨除け栽培のシャインマスカットなど、国府ブドウの作型や品種ごとの生産を安定化する必要がある。R元年知事表敬訪問時にネーミングした「万葉のしずく」を普及所も支援しR2に商標登録、ブランド名を冠したラベル等を作った。</p> <p>3 <u>R2～3年新植時は産地の方向性や目標を示したものがなく、入れ物（果樹園）だけ残して空中分解する恐れがあった。近い将来に向けた生産者の声を集め、産地の方針をまとめる必要があった。</u></p> <p>4 そのため産地の動きと農家の声を元にR3年3月、「国府支店果実部4000万円アクションプラン（以下プラン）」を果実部と東部農林事務所が一体となり作成した。一先ず、①産地の方針と②技術・品質向上、③担い手育成を主体としたプランとなった。プランの実行が産地生産基盤パワーアップ事業の目標値（R5:3,315万円）、成園時目標（R7:4000万円：プランの目標）への行動となる。</p> <p>5 今後更に、産地維持に向けた方針を打ち立てる必要があり、検討しているところ。</p>
普及活動の課題・目標	<p>【課題】</p> <p>1 R2～3に約1.2ha新植したが、目指すべき目標と行動計画がなかったので、生産者の声を集めて明文化する。</p> <p>2 令和7年販売額4,000万円目標として策定したプランに従い行動計画を実施する（R3年度～）。</p> <p>3 当初プランに記載できなかった生産者等の声を生かし、盛り込む内容を拡充する（R4年度）。</p> <p>【目標】</p> <p>1. プラン作成支援：成園時に産地の目標となる計画を作る（R2年度）。</p> <p>2. プラン実施支援（R3年度～）</p> <p>ア. 産地の方針の共有（果実部の販売額目標の共有、目標とする商品・規格の共有）</p> <p>イ. 技術・品質向上（シャインマスカットの栽培マニュアル、栽培管理の徹底、よその果実や園を知る）</p> <p>ウ. 担い手の育成（ベテランによる新規栽培者の個別指導、担い手の組織化・活動「同志会」）</p> <p>3. プランの拡充（R4年度～）</p> <p>産地維持のため必要な分野の検討（経営安定、就農促進、販売促進、園地継承など）</p>
普及活動内容	<p>1. プラン作成支援</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・支部長会でR7年販売額4000万円を目指した産地のプランを作ることを提案した。</li> <li>・プランの検討会を5回開催しKJ法(情報をカードに記載しグループ討議して意見を集約化していく)で生産者の声を集めた。</li> </ul> <p>2. プラン実施支援（R3年度～）</p> <p>ア. 目標の共有</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・販売額4000万円の目標を生産者に共有。プラン配布や指導会で周知を行った。</li> <li>・目標とする商品・規格について、目合わせを通して選果員の選果指導を行った。</li> </ul> <p>イ. 技術の徹底</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・今後のマニュアル化に資するため、シャインマスカットの基本技術を試験実施した。</li> <li>・栽培管理記録（トレサビ）に記載の無かった項目（休眠打破剤・液肥・植調剤等）の追加を促した。今後、新たな様式を作り、生産者への技術の徹底を図る。</li> <li>・成績優秀者を賞するブドウコンクールで各生産者個人の年間成績・順位を返すよう促した。</li> <li>・果実部の選果を見た事が無い生産者に、選果を見たり参加したりするように促した。</li> </ul> <p>ウ. 担い手の育成</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・新規栽培者にベテラン栽培者が担当して指導する「ぶどうの家庭教師」制度を提案し、実施支援した。</li> <li>・葡萄同志会の組織化を勧め、農協の葡萄指導協議会下に「いなば葡萄研究同志会」を設置した。R3年5回、R4年5回研修会等の企画を実施した。</li> </ul> <p>3. プランの拡充（R4年度～）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・生産者がコロナ感染。果実部内の意見を受けて、急な病気やけが、災害で栽培管理出来なくなった生産者を果実部員が助け合う規程（生産者BCP※）の作成を支援した。（※事業継続計画(Business Continuity Plan)：万一のことが起きた際、事業継続する方法を記した計画）</li> <li>・果樹園と経営の継承に備えるためアンケート調査を実施中。</li> </ul>

普及活動の成果

- 1 プラン作成
  - 生産者の声を集めた**国府支店果実部ブドウプラン**が作成され、生産部員に配布された (R3.3)。⇒新植園の成園化・産地の生産額向上と新規栽培者の定着を図る目標。すべきことが明確化。
- 2 プラン実施：プランの目標達成に向けて、実施した。
  - ア. 目標の共有
    - ・プランを全生産者に配布した。役員は会合の冒頭挨拶等で**販売額 4,000 万円目標**に触れるなどプランの周知が進んでいる。
    - ・シャインマスカットは適度な大きさ、青すぎない、かすり症があまりない適熟品で収穫し、高糖度に仕上げるということが意識共有された。(※かすり症とは果皮が茶色く褐変する生理障害)
  - イ. 技術の徹底
    - ・ブドウコンクールで各生産者の成績・順位が返され、品質・出荷量への意識が高くなった。
    - ・選果を見たり参加する生産者が増えた。選果の仕方が伝わり、収穫技術の向上が期待できる。
  - ウ. 担い手の育成
    - ・「**ぶどうの家庭教師**」制度が実施され、ベテラン生産者の指導により経験が浅い新規栽培者の新植園は順調な成園化が進んでいる。また既存園では栽培の安定化が図られている。
    - ・「**いなば葡萄研究同志会**」が組織化され、当会で生産者の栽培技術・知識の底上げを図っている。またいなば管内の若手ブドウ生産者の交流が進みつつある。
- 3 プランの拡充
  - ・今後、**生産者 BCP**をプランに「エ. 経営安定」という新たな分野として加え、急な病気・けが・災害等の場合の援農体制を通じて生産者の**経営安定**に資する。



国府支店果実部のブドウの面積と販売状況の推移

具体的なデータ・写真等



KJ法を用いた果実部プランの検討の様子



葡萄同志会 花穂整形指導会



生産者の声マップ (担い手育成の分野のみ抜粋)



収穫援農作業の様子 (生産者 BCP)

残された課題

- 1 プラン実施
  - 令和7年販売額 4000 万円の実現に向けて、プランの実施を進める。
  - ・シャインマスカットの栽培マニュアルの作成
  - ・R5 年度の栽培管理記録の様式を変更、重要な管理項目を追加し、栽培指導の徹底を図る。
- 2 プランの拡充
  - 産地維持に必要な項目を検討する (経営安定、就農促進、販売促進、園地継承など)。
  - ・果樹園と経営の継承アンケート調査をまとめ、生産者に返す。産地の継承について検討する。

課題区分	特技課題（畜産）
課題名	和牛飼育農家の生産技術改善による経営安定化 ～子牛育成技術の向上のために～ (2年目/3年計画)
普及対象	和牛子牛飼育農家 全 36 戸（うち重点対象農家 5 戸）
普及活動の背景	<p>活動の背景</p> <p>鳥取県東部（JA 鳥取いなば管内）は、第 1 回全国和牛能力共進会で優秀な成績を収めた「気高」号を産出した地域であり、古くから和牛との関わりが深い。現在は、県内和牛肥育牛飼育頭数の半数近くを有するなど、和牛肉生産の中心地である。</p> <p>近年、県東部においても繁殖農家の規模拡大（繁殖雌牛の増頭）が進んだ他、肥育農家の一貫経営化、酪農家の繁殖部門導入や繁殖農家への転換が行われている。</p> <p>一方、従前より東部地区は和牛子牛の育成面に課題があり、和牛子牛市場への出荷体重は県平均に達していない。また、特に繁殖経営において、技術面（母牛繁殖、子牛哺育・育成）において一定の水準に達していない生産者が見受けられる。</p>
普及活動の課題・目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 課題名 繁殖部門の生産技術向上及び経営改善支援（全 36 戸）</li> <li>○ 子牛管理             <ul style="list-style-type: none"> <li>ア 哺育期（生後～3 か月齢）の管理支援…哺育子牛育成技術向上</li> <li>イ 育成期（4 か月齢～子牛出荷）の管理支援……和牛セリ出荷牛の育成技術向上</li> </ul> </li> </ul>
普及活動内容	<p>従来より、東部地区は和牛子牛市場への出荷体重は県平均に達しておらず、又、ばらつきが大きいとの評価が定着している。一方、詳細な生育状況調査は行われておらず、飼養管理面での問題点の把握が不十分だった。そこで、新規の取組として、R2.4 月より哺育期間及びセリ出荷時に、管内の和子牛全頭についての生育状況を調査・把握し、その結果を飼育管理改善指導に用いることとした。</p> <p>ア 子牛は哺育期間（0 ヶ月齢～3 ヶ月齢）の発育がその後の生育に大きく影響すると言われていたことから、管内の和子牛全頭を対象に育成調査（胸囲の計測）を行った。</p> <p>その結果、東部地区の特色として、哺育期の育成は人工哺育を実施している生産者が全体の 64%（23 戸/36 戸）であり、哺育期の育成が芳しくない生産者は、人工哺育を行っている方が多い事が分かった。結果をもとに、改善に取り組む生産者（全体の 44.4%（16 戸/36 戸））に対し哺乳量の聞き取り等を行い、哺育期間の飼育管理の改善について指導した（随時）。</p> <p>イ 和子牛セリ（8～10 ヶ月齢）時に管内の出荷和子牛全頭を対象に調査（体高、胸囲、栄養度の計測）を行い、哺育期間終了後からセリ出荷までの育成状況を把握し、課題がある農家については飼料給与量等を聞き取り、適切な飼料増給、濃厚飼料中心から粗飼料中心への切替時期、敷料の適期交換等について助言した（随時）。</p>
普及活動の成果	<p>生育状況調査の結果、問題点として以下のことが考えられた。</p> <p>ア 哺育期</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・哺育期の乳量が不十分。</li> <li>・スターターを規定量食べる前に離乳してしまうため、牛が十分に飼料を食べられない。</li> <li>・牛房内が汚れており、牛が休めない。等</li> </ul> <p>イ 育成期</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・飼料の給与内容について、濃厚飼料中心から粗飼料中心への切替がうまくいかない。</li> <li>・濃厚飼料を多給した結果、太りすぎている。</li> <li>・飼料を十分に与えていなかったため、痩せすぎている。</li> <li>・牛房内が汚い、又は牛房面積に対して牛が多すぎるため、牛が休めない。等</li> </ul> <p>上記の課題に対して、下記の活動を行い問題点の解決を図った。</p> <p>ア 各生産者の哺育技術の改善点を、哺育技術が良好な生産者の事例紹介（哺乳量は飼料メーカー推奨より多めに与える、スターターは慣れさせるために産まれた翌日から与える、敷料は 3 日おきに交換する等）や、JA 主催の研修会での報告等を行うなど、哺育技術向上の啓発活動を行ったところ、管内哺育牛の発育状況は改善傾向がみられた（表 1）。</p> <p>イ 哺育時の調査結果と、セリ時の調査結果をまとめたものを全戸に配布し、調査結果から考えられる和子牛育成の課題を各生産者に伝えるとともに、飼料の増給方法等についても助言したところ、県平均との体重差は R2 年の 6.3kg から 0.7kg となった（図 1）。</p> <p>育成期について特に課題のあった生産者 1 戸については、追加調査（濃厚飼料の給与量がピークを迎える 4～5 ヶ月齢時の体測）を行うことで、濃厚飼料の増給が遅く、そもそも十分な量が給与されていないことを確認した。この課題を解決するため、濃厚飼料の増給を早めた、当該生産者独自の飼料給与マニュアルを生産者や関係者と協議のうえ R3.10 月に作成し、新たなマニュアルをもとに飼養管理を行ったところ、育成状況の改善がみられた（図 2）。</p>

<調査風景① 哺育期>



<研修会の様子>



<打合せ風景>



表1 東部管内全体の哺育牛の育成状況

	調査頭数(頭)	平均胸囲(cm)	平均月齢(月)	$\sigma$ (※)
R2年度	795	96.0 ± 8.2	2.19 ± 0.61	-0.14 ± 1.34
R3年度	713	97.4 ± 8.3	2.27 ± 0.63	0.04 ± 1.29
R4年度 (R4.4月 ~10月)	594	97.9 ± 7.9	2.32 ± 0.62	0.02 ± 1.23

※ $\sigma$  (シグマ) : 月齢に応じた牛の発育を確認するための目安。  
「0」が全国平均。「プラス」なら平均以上、「マイナス」なら平均以下。

具体的な  
データ・  
写真等

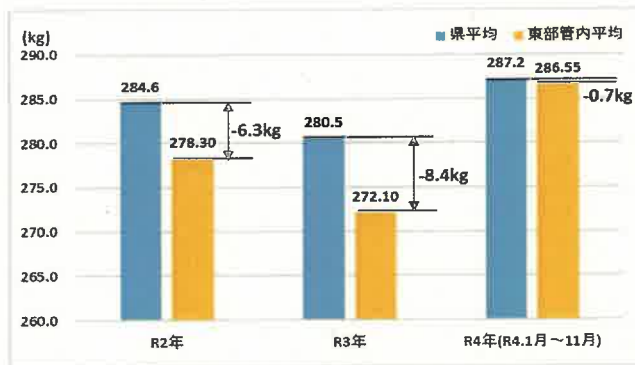
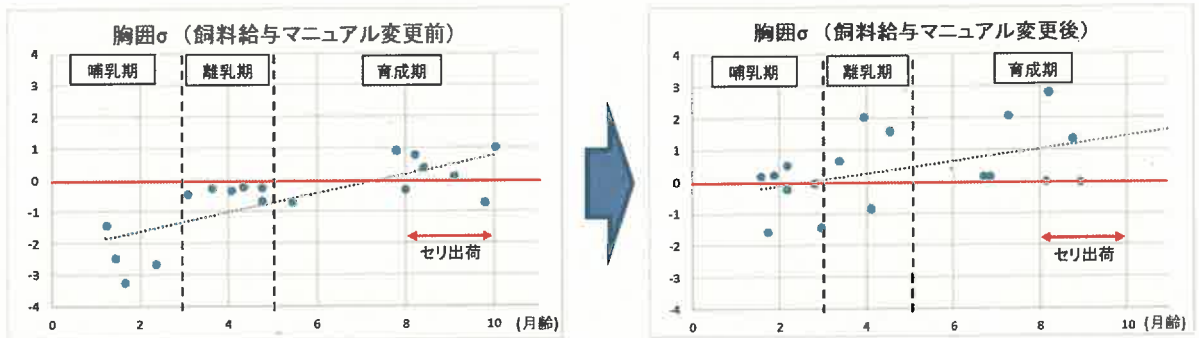


図1 セリ出荷牛の体重推移



・調査頭数はマニュアル変更前5頭、変更後4頭。マニュアル変更前は2~4ヶ月齢時の $\sigma$ はマイナス中心だったが、マニュアル変更(哺乳量の増給)により向上した他、セリ出荷時においても牛が大きくなっていることが確認された。

残された  
課題

県東部におけるセリ出荷時体重は県平均並みまで近づいたものの平均には至っておらず、未だ育成技術が十分とはいえない。さらに、季節的な要因や母牛の影響(分娩前の飼料給与と管理等)を考慮すると、調査はまだ中途の段階であるといえる。そのため、今後も全頭・全戸調査を継続し、生産者ごとの課題を整理しながら、育成技術の改善を図り、東部管内全体の和子牛育成技術の向上を進めていく。

課題区分	特技課題（野菜・花き）													
課題名	倉吉西瓜の産地強化・発展支援 <span style="float:right">(2年目/3年計画)</span>													
普及対象	倉吉西瓜生産部会 125名 94ha	重点対象者 新規就農者 11名 担い手（経営相談所登録者等）6名 親元就農ほか研修生 7名												
普及活動の背景	<p>倉吉西瓜生産部会では平成29年に「倉吉スイカ16億円達成プロジェクト」を立ち上げ、産地主導型の新規就農者確保に向けた取組等を行い、これまでに23名の新規就農者を確保してきた。また、令和2年度には「倉吉西瓜産地強化・加速化プラン」（地域プラン）を策定し、「新規就農者の確保」「担い手の育成」「優良農地の継承」「収益性の向上」「ブランド力の向上」の5項目を重点課題として、産地のさらなる発展に取り組んでいる。まずはプラン目標（目標年：R7年度）である販売額12億円や、新規就農者確保（20名/R3～7の5年間）等を目指す。</p>													
普及活動の課題・目標	<p><b>【課題】</b></p> <p>1 収益性の向上、担い手の育成</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ベテラン生産者の勘所の技術伝承による栽培技術の底上げ</li> <li>・新規就農者の要望に沿った研修の開催と個々の反省点の改善による出荷率アップ</li> </ul> <p>2 優良農地の継承</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・優良農地継承のしくみづくり、遊休農地のスイカ農地への再生</li> </ul> <p>3 新規就農者の確保</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・生産部会を主体とした新規就農者確保や産地情報発信に向けた取組支援</li> <li>・関係機関と連携した地域プランの円滑な事業推進</li> </ul> <p><b>【目標】</b></p> <table border="1" style="width:100%; border-collapse: collapse;"> <thead> <tr> <th style="width:30%;">項目</th> <th style="width:40%;">目標値(R7)</th> <th style="width:30%;">備考</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>反収向上（春作）</td> <td>350cs (5,425kg/10a)</td> <td>現状[R2]:330cs(5,115kg/10a)</td> </tr> <tr> <td>新規就農者数</td> <td>12名（3年間・親元就農も含む）</td> <td>研修生の確保も部会主体で推進</td> </tr> <tr> <td>販売額</td> <td>12億円</td> <td></td> </tr> </tbody> </table>		項目	目標値(R7)	備考	反収向上（春作）	350cs (5,425kg/10a)	現状[R2]:330cs(5,115kg/10a)	新規就農者数	12名（3年間・親元就農も含む）	研修生の確保も部会主体で推進	販売額	12億円	
	項目	目標値(R7)	備考											
	反収向上（春作）	350cs (5,425kg/10a)	現状[R2]:330cs(5,115kg/10a)											
新規就農者数	12名（3年間・親元就農も含む）	研修生の確保も部会主体で推進												
販売額	12億円													
普及活動内容	<p>1 技術の見える化による技術伝承</p> <p>(1) ベテラン生産者の管理作業を視点カメラで撮影して、動画によるマニュアルを作成し、部会員がYou Tubeで視聴できるよう共有した（計30本）（写真1）。</p> <p>(2) スマート農業（ハウスサイド自動巻き上げやリアルタイム環境モニタリングシステム※）の導入事例を紹介、推進した。 ※温度等の情報がスマホ等でどこでもいつでも確認できるシステム</p> <p>2 新規栽培者の出荷率向上に向けた取組</p> <p>(1) 新規栽培者向けの勉強会支援</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・新規就農者、研修生、指導部員、新規就農担当役員で意見交換・圃場巡回（交配時期）</li> <li>・出荷指導会（6月上旬） ・R4年作反省会、肥料勉強会（10月中旬）</li> </ul> <p>(2) 新規就農者等計12名に対し、営農指導員と一緒に面談 ※1年目の生産者は役員も同行（本作の着果率、出荷率、反省点と次作への改善点、要望の聞き取りなど）</p> <p>(3) 栽培期間中の失敗例、質問等をまとめたQ&amp;Aを、指導担当の部会員と相談して作成、作付準備前の座談会で配布（写真2）。</p> <p>3 優良農地の確保と継承に向けた取組支援</p> <p>(1) 部会員への作付け意向、農地アンケート結果（回収率93%）をもとに農地情報を収集し（部会独自の様式も検討）、情報提供、マッチングする仕組みづくりを支援した。</p> <p>(2) スイカ農地再生（4ほ場190a）に向け、人・農地チーム会議等で事業実施に向けた調整を行った。土壌調査を行って入植希望者に見てもらい、入植を後押しした（写真3、4）。</p> <p>4 新規就農者確保に向けた取組支援</p> <p>(1) 産地や部会での支援体制、研修生の様子、新規就農者の声を入れた動画を部会、農協と連携して制作し、動画のQRコード付きPRチラシ作成を支援した（写真5）。</p> <p>(2) 農大等と連携した活動（講義や雇用就農相談会への参加、産地体験会など）支援</p> <p>(3) 就農相談会への参加支援（新・農業人フェア（11月））</p> <p>5 地域プランを活用した産地活性化の取組支援</p> <p>(1) 地域プランの進捗状況や今後の取組について、年度当初の検討会や中間検討会（9月上旬）を実施し、情報共有や意見交換を行った。</p> <p style="padding-left: 20px;">かん水設備の整備等、プランを活用した事業の実施に係る調整支援を行った。</p> <p>(2) トンネル支柱の融通の仕組みづくりについて部会に働きかけ、運用に向けた協議、生産者へ</p>													

の周知、支柱の現地確認等を営農指導員と支援した（2年間で4,770本融通（写真6））。  
 (3) 産地 PR 支援（Sun-in 未来ウォークやとっとり・おかやま新橋館での PR に係る調整等）

普及活動  
の成果

- 1 R4年産の生産及び販売ともに好調で、販売額 12.7 億円、反収 352cs となり、地域プラン目標（R7）を3年前倒して目標を達成した。
- 2 各管理作業の動画マニュアルを指導部と制作して部会へ公開した結果、新規栽培者を中心に好評であった。動画を参考につる引きをして病気が減ったという声もあった。  
 《動画視聴回数》計 1,007 回（30 本） 6~97 回視聴/本
- 3 部会の指導体制が確立してきており、また着果率、出荷率をいかに向上させるか、個々によく考えて栽培できていることから、重点対象の新規就農者の7割以上が出荷率90%以上であった。
- 4 R3~4年にかけて4か所、計 1.9ha の耕作放棄地がスイカ畑へ再生し、入植者5名も決定。R5年作からスイカの栽培が開始される見込みである。
- 5 新規就農担当役員を中心に、産地PR動画、チラシの作成、就農相談会への出展等に積極的に取り組んだ結果、R3~4年の2年間で新規就農者が10名増加した（親元就農も含む）。また、研修生（雇用等）も4名確保できた。
- 6 計画以上の成果が出ていることから、部会役員を中心に産地全体で活性化の意識が高まっており、選果場の整備など、更なる産地発展の取組が検討されている。



芯止め (萬場部長ハウス)  
59 回視聴 - 1年未満  
写真1 動画マニュアル例

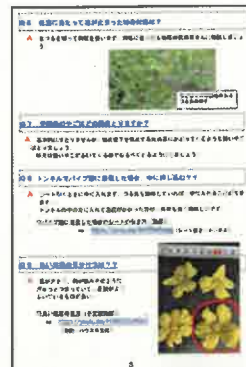
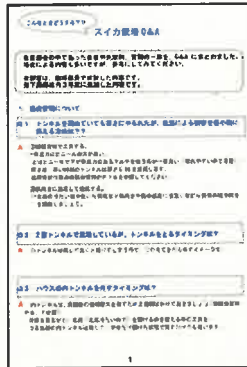


写真2 Q&A 抜粋



具体的な  
データ・  
写真等



写真3 第1弾の再生前の農地（左）と再生後の農地（右）



写真4 土壌調査の様子



写真5 新規就農希望者向け PR チラシ

産地や研修の紹介  
などの動画が見れます



写真6 トンネル支柱融通の様子

残された  
課題

- 1 R5年作から導入が増えるリアルタイム環境モニタリングシステムの有効活用を支援する。
- 2 R5年作は特に新規就農者が多いため（独立就農3名、親元就農開始2名、雇用就農研修生3名）、親方や役員、ベテラン生産者、JAと連携しながら指導体制を強化する。
- 3 農地情報の収集・共有の仕組みづくりを軌道に乗せる。新たな土地でのスイカ農地再生。
- 4 産地体験会の参集範囲や内容の検討、マスコミを活用しながらのPR活動の実施等、R4の反省を踏まえた新規就農者確保に向けた活動の発展を支援する。

課題区分	総合支援課題
課題名	新規就農者の自立支援と農業青年組織の活動促進 (2年目/3年計画)
普及対象	新規就農者 (重点対象 12名)、独立就農及び親元就農希望者
普及活動の背景	<p>管内の就農相談は毎年 30 件程度あり、相談者の環境や農業に対する適性は様々である。新規就農者は将来の担い手になるだけでなく地域に溶け込み、地域を守ることも期待されている。従って本人の適性に合った方向性を提示し、安心して営農できるための伴走支援が必要。</p> <p>近年、西瓜やミニトマト生産部などで担い手不足に対する危機感が高まり、生産部主導で生産者の「確保」の機運が高まっている。このため、普及所・生産部・町・農協などの関係機関が役割分担しながら連携して、担い手確保の取組みを進める必要性が一層高まった。</p> <p>さらに就農後、初期の経営安定を図るため、専門班と連携して技術・経営管理能力の向上、営農が順調でない者に対する経営改善支援を行う必要もある。</p>
普及活動の課題・目標	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 相談者は経歴・希望品目など様々である。適正な方向性を示すために関係者が役割分担しながら対応しているが、関係者が多いため状況に応じた情報の共有が必要である。</li> <li>2. 「確保」に係る活動として、産地紹介や人材の呼び込み、産地が求める人材と就農希望者との適正なマッチングなどを行う必要がある。</li> <li>3. 経営試算の経験が無い就農希望者が「青年等就農計画」を自力作成できる能力を習得させる。</li> <li>4. 新規就農者全員が支援対象だが、技術が難しい品目や年齢が若いなどの 12 名を重点対象者として「個票」を作成の上、個別・集合支援を行って普及計画 3 年目に 80%以上の者が目標所得を達成できるようにする。</li> </ol>
普及活動内容	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 関係機関及び所内の情報共有と支援の進捗管理 <ol style="list-style-type: none"> <li>(1) 就農相談者、新規就農者等の情報共有 <p>共有者に応じて下記の整理表を作成</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・対象者状況一覧表：対象者の課題や状況をまとめ、進捗管理をする (町、普及所内)</li> <li>・就農相談整理票：毎月の動向のまとめ (所内専門班)</li> <li>・個票：重点対象者(12名)の課題や支援状況などを記載 (所内専門班)</li> <li>・その他、農業経営・就農支援センターと情報共有、普及所員へ新規就農制度勉強会を実施。</li> </ul> </li> </ol> </li> <li>2. 新規就農者の確保に対する支援 <ol style="list-style-type: none"> <li>(1) 大栄西瓜産地振興に係る新規就農者確保の取組支援 <ul style="list-style-type: none"> <li>・大栄西瓜 100 万玉維持のための新たな担い手確保支援(検討会、意識調査、募集チラシ、産地体験会、研修先マッチング、先輩との意見交換など)。</li> </ul> </li> <li>(2) 琴浦町ミニトマト・梨の研修生確保に向けた取組支援 <ul style="list-style-type: none"> <li>・生産部、町と連携した栽培希望者の呼び込み、収穫体験、営農研修など</li> </ul> </li> </ol> </li> <li>3 就農希望者等に対する支援 (就農前) <ol style="list-style-type: none"> <li>(1) 就農相談会による方向性の提示 <p>相談窓口を町に一本化し、関係者と連携しながら相手の状況にあわせた助言 (品目・試算・支援策・技術習得方法など) を行って方向性を明確にする。</p> </li> <li>(2) 方向性決定者に対する就農準備支援 <p>青年等就農計画作成希望者に対して認定新規就農者の取得のための「勉強会」を開催。 (内容は就農に向けた準備に係る計画作成方法、機械選定、技術習得方法、農地確保など。)</p> </li> <li>(3) 認定新規就農者の取得、親元就農研修の実施支援 <p>&lt;独立就農者&gt;青年等就農計画、規模決定根拠及び機械導入理由書などの内容理解と作成支援。 &lt;親元就農者&gt;親元就農希望者の勉強会及び研修計画の内容理解と作成支援。 &lt;就農前の者&gt;集合研修 (就農に必要な届出、農地確保、資金借入、補助事業などの具体的な手続き) と意見交換会。</p> </li> </ol> </li> <li>4 新規就農者に対する自立支援 (就農後) <ol style="list-style-type: none"> <li>(1) 就農計画の目標達成に向けた支援 <ul style="list-style-type: none"> <li>・重点対象 12 名に対する栽培技術の向上・経営改善に向けた個別巡回。</li> <li>・経営が順調でない者 (1 名) に対する振返りの会と今後の対応協議。</li> <li>・就農計画変更、機械導入理由書・規模決定根拠などの方向性協議及び資料作成支援。</li> </ul> </li> </ol> </li> </ol>

- ・東伯地区農業士会と連携した圃場訪問と指導。
- (2) 新規就農者に対する農業基礎知識の習得支援
  - ・西瓜、ミニトマト、梨などの新規就農者に対する技術・経営向上研修（専門班と連携）

普及活動  
の成果

### 1. 情報共有

- (1) 関係機関との情報共有が進み、一覧表は支援の優先順位付けなどで活用されている。
- (2) 農業経営・就農支援センターとの情報共有で3名が研修後に独立就農する方向になった。

### 2. 確保

- (1) 大栄西瓜組合協議会では新規就農サポート部（2名）を新設して面談や産地体験会などで活動するなど、組織ぐるみで「確保」に対する意識が高まり、研修の親方候補も多数提示していただいた。大栄西瓜の新規就農希望者（独立）が8名になった（例年は1～3名）。
- (2) 琴浦町ミニトマトは相談会や体験会により希望者2名（1名は雇用研修、1名はアグリスタート研修）、地域おこし協力隊（研修生）も数名検討中。梨の希望者は2名確保できた。

### 3. 就農相談・就農準備

- (1) R4年度の相談者22名の方向性は①独立就農:10名 ②親元就農:3名 ③定年就農:2名 ④制度の相談:4名 ⑤再検討:3名となった。
- (2) 勉強会15名。経営試算・計画作成手順等を示して効果的な計画作成を進めている。
- (3) 就農計画作成18名（うち完成13名）。
- (4) 親元就農勉強会:7名、親元計画作成:8名（うち完成7名）。
- (5) 重点対象者 課題ごとの技術支援により、病害虫の低減、品質・収量向上につなげている。



写真1 新規就農サポート部の面談



写真2 農薬の基礎講習



写真3 農業士会の現地巡回

具体的な  
データ・  
写真等



写真4 ハウス建設研修会

		(人/年度)									
区分	H28	H29	H30	R1	R2	R3	R4	R5	R6以降	年平均	
独立	琴浦町	1	4	2	5	5	7	2	3	5	3.8
	北栄町	2	1	2	3	7	8	7	6	7	4.8
親元	琴浦町	5	6	4	2	0	0	5	2	5	3.2
	北栄町	3	1	5	2	5	7	6	1	13	4.8

残された  
課題

- ・確保の取組みがブロッコリーに波及した。農地の確保などの課題もあるが受入意向調査や経営モデル試算の提示など活動を進めている。今後効果的な活動ができるよう支援が必要。
- ・大栄西瓜、琴浦ミニトマト・梨などは新規就農者の受入体制が整って研修が行われているが、品目によっては親方候補（研修先）が少ないなどの課題がある。
- ・近年、資材価格の高騰によりハウスの新設では計画が成り立たないなどの課題がある。
- ・親元就農研修の積極的な広報活動を行ってこなかったため、十分な成果が出ていない。今後は生産部の集まりなどでPRを行って、後継者の確保増につなげたい。
- ・新規就農業務は広い知識と経験が必要である。普及員の半数は50歳代で平均年齢は48歳。今後は若手普及員のスキルアップも課題である。
- (その他の課題)
- ・就農希望者の独立就農の資質は面談ではわからないため、短期の農作業体験など就農決定までに適性を判断できる機会が必要。
- ・就農後の目標所得の達成等に向け、技術や経営支援を継続して行う必要がある。特に、5年目の1名に重点的に改善のための助言を行っているが、目に見えた効果があがっていない。



課題区分	特技課題（作物）																						
課題名	大規模水田経営体の経営発展～（株）みのりのファームの取組事例～（2年目／3年計画）																						
普及対象	<ul style="list-style-type: none"> <li>管内水田大規模水田経営体（株式会社 9、農事組合法人 1、合同会社 2、個人 1）</li> <li>重点対象 5 経営体（（株）A、（株）B、（株）C、（株）みのりのファーム、個人 E）</li> </ul>																						
普及活動の背景	<ul style="list-style-type: none"> <li>地域の農業者の高齢化や減少にともない、担い手に農地が集まっている。</li> <li>水田の担い手は経営強化だけでなく、地域維持への思いもあり、規模拡大を進めている。</li> <li>各々の担い手は個別の課題を抱えており、解決に向けて経営体に合わせた支援が必要である。</li> </ul>																						
普及活動の課題・目標	法人名	設立日	経営品目	目標	R4 年支援概要																		
	（株）A	H29.10	水稲・大豆・白ねぎ	改善作業の明確化	作業負担の実態把握と改善対策																		
	（株）B	H29.10	小麦・大豆	反収：小麦 400 kg 大豆 200 kg	収量確保に向けた対策																		
	（株）C	R3.1	水稲・大豆・白ねぎ	GAP チェックシート 1 項 目以上改善	経営状況の把握、 従業員の労働安全や働きやすい環境づくり																		
	（株）みのりのファーム	R4.1	水稲・豆類・果樹	乾田直播反収 500 kg	乾田直播栽培の栽培技術や効果確認																		
	E（個人）	—	水稲・そば	食味見える化の数値化	食味値確保に向けた条件の明確化																		
普及活動内容	<p>以下、重点的に取り組んだ（株）みのりのファーム（以下、みのりのファーム）を記載する。</p> <p><b>1. 経営概要</b>                  構成員・役員：3名、経営面積：約33ha（内訳：水稲約20ha、大豆約7ha、小豆約4ha、果樹約2ha）</p> <p><b>2. 乾田直播栽培の取組背景</b>                  田植作業の時期（5/下～6/上）に限られ、経営面積が増加する中、水稲の苗づくりに必要なハウスが不足。施設や機械を有効活用し、新たな投資が不要であるため取組を開始。</p> <p><b>3. 主な普及活動</b>                  乾田直播栽培は、管内でも事例がなく、みのりのファームにとって初めて取組みであるため、事前に代表者と検討し、以下の普及活動を通して、栽培技術支援や取組効果の確認を行った。</p> <p><b>（1）実証ほの設置と生育調査に基づいた助言</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>代表者と役割分担（表1）のうえ、実証ほ場を選定し、栽培方法を検討した（下表）。</li> <li>除草剤散布の時期、中干しを始める茎数、追肥の施肥量や時期等を助言した。</li> </ul> <table border="1"> <thead> <tr> <th></th> <th>乾田直播栽培（実証ほ）</th> <th>移植栽培（対照ほ）</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>品種</td> <td>ひとめぼれ</td> <td>同左</td> </tr> <tr> <td>面積</td> <td>30 a</td> <td>同左</td> </tr> <tr> <td>播種日 田植日</td> <td>5月19日</td> <td>6月3日</td> </tr> <tr> <td>肥料</td> <td>あきまる 202 40kg/10a、アグリ NK520 15kg/10a</td> <td>同左</td> </tr> <tr> <td>除草剤</td> <td>ラントアップ、マッシュ乳剤、アレル SC、トマス MF</td> <td>ラントアップ、アシュラ 1 kg 粒剤、アレル SC、トマス MF</td> </tr> </tbody> </table> <ul style="list-style-type: none"> <li>その結果、収量については、移植栽培よりやや低かったが、「（直播栽培の）収量は移植栽培に比べて約1割低下」と言われる中、差は1割未満に抑えられた（表2）。</li> <li>外観品質については、実証ほ、対照ほともに1等であった（表2）。</li> </ul> <p><b>（2）作業労働時間及び収益性算出に係る材料収集</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>みのりのファームが記録した作業労働時間を聞き取りし集計した。その結果、実証ほで 0.6 時間（14%）少なかった（表3）。これは、本田準備の「代かき」の削減効果が大きかった（図1）。</li> <li>収量、品質、栽培に要した肥料・農薬・資材等を代表者から聞き取りし、収益性を算出した。実証ほ場は、対照ほ場と同等の収益性が見込まれた（表4）。</li> </ul> <p><b>（4）栽培技術や経営評価の検討</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>生育調査、作業労働時間、収益性等をもとに、栽培技術や経営評価を、代表者と検討した。</li> </ul>						乾田直播栽培（実証ほ）	移植栽培（対照ほ）	品種	ひとめぼれ	同左	面積	30 a	同左	播種日 田植日	5月19日	6月3日	肥料	あきまる 202 40kg/10a、アグリ NK520 15kg/10a	同左	除草剤	ラントアップ、マッシュ乳剤、アレル SC、トマス MF	ラントアップ、アシュラ 1 kg 粒剤、アレル SC、トマス MF
		乾田直播栽培（実証ほ）	移植栽培（対照ほ）																				
品種	ひとめぼれ	同左																					
面積	30 a	同左																					
播種日 田植日	5月19日	6月3日																					
肥料	あきまる 202 40kg/10a、アグリ NK520 15kg/10a	同左																					
除草剤	ラントアップ、マッシュ乳剤、アレル SC、トマス MF	ラントアップ、アシュラ 1 kg 粒剤、アレル SC、トマス MF																					
普及活動の成果	<p><b>（1）乾田直播栽培技術の確立と収益性の評価（反省会を実施）</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>移植栽培と比較し、労働時間は14%減、ほぼ同等の収益性であることを確認した。</li> <li>自らで実証ほの労働時間や経費を把握したことなどにより、省力化につながる導入可能な技術として、代表自身が実感した。</li> <li>「方向性が見えてきた」と代表は継続して取り組む意向である。</li> </ul>																						

(2) 経営管理意識の高まり

- 代表と収益性などについて話し合ったことも要因で、ほ場条件を点数化し「地代の見える化」の取組を開始した。

(3) 他担い手への波及

- 西部水田経営者会議（※）で取組結果を紹介したところ、有志の勉強会開催、令和5年産から複数の担い手が試験栽培を予定するなど、広く関心が高まっている。

※西部水田経営者会議：会員28名（R5.1月現在）、県西部の大規模水田経営体で構成する組織

表1 役割分担

項目	みのりのファーム	普及所
実証ほ場の設置・栽培計画の作成	○	○
生育調査とそれに基づく助言	—	○
生育調査とそれに基づく助言	○	
収益性算出に係る材料収集 (収量、種子代、肥料代、農薬代等)	○	—
収益性の算出	—	○
栽培技術や経営評価の検討（反省会）	○	○

表2 収量・品質結果

区	収量 (kg/10a)	品質 (等級)
実証ほ①	498	1等
対照ほ②	535	1等
差(①-②)	37	—

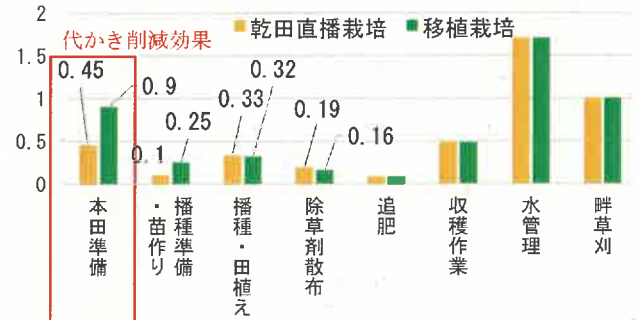
表3 作業労働時間

区	作業労働時間 (hr/10a)
実証ほ①	4.33
対照ほ②	4.89
差(①-②)	0.56 (対照ほと比較し約14%減)

表4 10a当たりの経営試算

		乾田直播	移植栽培
収入	米販売金額	86,250円	92,653円
	計①	86,250円	92,653円
経費	種苗費	3,540円	2,360円
	肥料費	14,676円	14,676円
	農薬費	15,375円	15,170円
	労賃	3,682円	4,152円
	減価償却費	8,775円	12,786円
	その他	22,401円	27,097円
	計②	68,449円	76,241円
	所得(①-②)	17,801円	16,412円

図1 10a当たりの作業労働時間（単位：時間）



(参考) 播種作業（5月19日撮影）の様子



所有する大豆・小豆播種機を使用し播種

具体的なデータ・写真等

残された課題

(1) 収益性等の継続検討

- 年次的なリスクを把握するため、生育や収量を継続確認し、営農上の課題を整理する。
- 実態に合わせて労働時間や経費を確認し、収益性を再整理する。
- 収量の安定確保に向け、条間について比較検討する。

(2) 作業体系・位置づけの検討

- 播種時期、面積や品種等を検討し、乾田直播の経営上の位置づけや作業体系を代表と一緒に検討する。
- 乾田直播に適したほ場をリスト化する。

外部評価検討会 普及活動実績概要報告書

西部農業改良普及所大山普及支所

課題区分	特技課題（果樹）
課題名	大山果実部の新規就農者の育成確保と園地継承 ～ 農業研修生への就農支援を通じた後継者確保 ～ （2年目／3年計画）
普及対象	大山果実部 生産者：85名、面積：41ha ◎重点対象：地域おこし協力隊員として就農に向け梨農家で研修中の2名 (H氏…令和2年12月から研修中。令和5年4月に就農予定。S氏…令和4年5月から研修中。)
普及活動の背景	大山町では、平成26年度から町独自のアグリマスター事業を実施し、町外からの就農希望者を受け入れており、現在、2名が就農に向け受入農家（マイスター）のもとで研修を行っている。これら研修生は地域おこし協力隊（農業分野）として町に雇用されているが、研修における町の関与が少なく、研修内容はほぼ受入農家に任される状況となっている。
普及活動の課題・目標	普及計画上、毎年1名の新規就農者の確保が目標。 研修生（地域おこし協力隊）に対しては、就農への意思確認を適宜行うとともに、必要最低限の栽培技術や経営管理能力の習得や仲間づくりなど、研修生個々の状況や意向を踏まえ円滑な就農ができるよう大山町や受入農家に対し助言や支援を行う。
普及活動内容	<p>1 研修生や受入農家への指導・助言</p> <p>※栽培技術の習得支援は適宜、受入農家と連携して行っており、それ以外について記載する。</p> <p>(1) H氏への支援</p> <p>【令和2年度】*研修1年目（実質、研修期間は冬場の4か月間）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・県外から研修生が来ていることは承知していたが、普及所として特にかかわりを持つことはなかった。</li> </ul> <p>【令和3年度】*研修2年目</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・実質的に研修初年度であったが、研修生とのかかわりも少なかったこと、研修生本人や受入農家の意向を十分把握していないことから、今後より充実した研修ができるよう大山町に働きかけ、H氏と受入農家に対し個別に聞き取りを行った（10月）。 H氏…1年を振り返った感想、今後の研修希望、地域おこし協力隊終了後の意向等 受入農家…1年を振り返った感想、今後の研修予定、就農に向けた必要事項等</li> <li>・聞き取りを通じ、H氏は梨経営の知識がほとんど習得されていないことが判明。このため、普及所等を講師に梨経営等に関する研修会4回（令和3年12月～翌年3月）を実施した。4回目に今後の意向を確認したが、本人の意向が固まっていないことが判明した。</li> </ul> <p>【令和4年度】*研修3年目（最終年度）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・4月に大山町とH氏の今年の研修内容等について協議。7月に意向確認を行うこととし、H氏にはそれまでに意向を固めてもらうこととした。</li> <li>・普及所はH氏を訪ねる回数を増やし、技術習得に向けた栽培技術の習得支援を継続するとともに、H氏と受入農家の声を適宜聞きとり、意向を固めるための助言を行った。</li> <li>・7月に、意向確認会（研修生、大山町、普及所）を開催し、翌年4月に就農意向を示されたことから、必要な手続き等を説明し、1月に就農準備状況を確認することとした。</li> </ul> <div style="border-left: 1px solid black; border-right: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>《本人の意向（7月時点）》</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>㊦ 受入農家から園地（約60a）を借り、令和5年4月に就農する。</li> <li>㊧ ただし、認定新規就農者は目指さない。</li> <li>㊨ 大山果実部に加入して選果場に出荷する。</li> <li>㊩ 防除組合へ加入する（受入農家が調整）</li> </ul> </div> <ul style="list-style-type: none"> <li>・借り入れる園地の一部（12a）は、改植しジョイント栽培が計画されていることから、12月に一緒に琴浦町に視察に行くなど、土壌改良やジョイント大苗の植え付けについて受入農家等と指導を行った。</li> <li>・来年産の収量・品質維持のため、冬期間はせん定について受入農家と一緒に重点的に指導する予定。</li> </ul> <p>(2) S氏への支援</p> <p>【令和4年度】*研修1年目</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・受入農家に過度な負担がかからないよう、随時ほ場を巡回し、必要な技術支援等を行った。</li> </ul>

- ・研修生が産地で孤立しないよう、受入農家で研修の他に、経験年数の少ない生産者の勉強会（わかばとおやじの梨作り学校）や鳥取西部若手果樹農業者の会への参加を提案し、若い農業者等との交流を図った。
- ・選果期間中は選果場で研修することになったため、選果作業を通じ梨品種の特性を指導するとともに、作業の休憩時間に研修状況の確認を行うように努めた。
- ・上記の情報は、適宜大山町に報告し、情報共有を図った。

2 大山町に対する助言等

- ・町とは随時情報共有を行い、研修生は町職員であり、研修が適切に行われるかどうかは町の責任であることを繰り返し説明した。
- ・そのうえで、年間を通じた研修スケジュールの検討を行うとともに、受入農家に任せること、町が主体となって行うこと、普及所に依頼すべきことの整理を一緒に協議した。
- ・また、研修を行う上での受入農家（マイスター）の重要性や役割を改めて説明し、マイスター全員が共通認識を持った状態になるよう働きかけた。

1 研修生や受入農家への成果等

(1) H氏への支援

- ・梨経営にかかる理解度を早めに把握し、改善のための個別研修会を開催することにより、目指す梨経営や就農後のイメージを明確にしてもらうことができた。
- ・就農の意思確認も半年前（夏場）に確認できたため、受入農家も本人も早めに準備ができた。
- ・ジョイント大苗の定植も適期に適切に行うことができた。

(2) S氏への支援

- ・研修開始当初、まじめに考えすぎたり不安なことも多かったようだが、様々な研修会に参加し、同世代の農業者と交流することで、研修意欲も高まっている。
- ・選果場での研修を通じ、出荷された梨品種の特性を理解することができ、大変勉強になったと感想が聞かれた。

2 大山町に対する成果等

- ・研修生は町の職員であり、町が研修を主導する立場にあるという意識になりつつあり、研修のカリキュラム等について検討され始めた。
- ・3年ぶりに開催されたアグリマイスター総会でも、改めてマイスターの役割を説明し、研修生の就農に向けた協力体制が構築されつつある。

普及活動  
の成果

H氏：町、受入農家と合同の意見交換



S氏への研修支援



H氏・S氏：「わかばとおやじの梨作り学校」で既存生産者と一緒に研修

残された  
課題

- ・各研修生については、それぞれの意向や状況に合わせて、引き継ぎ大山町、受入農家、普及所が連携をとって支援していく必要がある。
- ・大山町やアグリマイスターと一緒に、具体的な研修スケジュールやそれぞれの役割を具体的に整理、構築していく必要がある。

外部評価検討会 普及活動実績概要報告書

日野農業改良普及所

課題区分	特技課題（野菜・花き）
課題名	日南トマトの産地強化 ～集落営農法人の野菜栽培における女性活躍推進～ (2年目/3年計画)
普及対象	JA 鳥取西部日南トマト部会、ファーム白谷(重点対象法人)、その他日野郡内の集落営農法人
普及活動の背景	<p>日南トマトは、平成 17 年度以降、高齢化による生産者数の減少が進み産地存亡が危ぶまれるなか、日南町は平成 21 年度から農業研修生制度を開始し、今年度までに 15 名が新規就農に至った。しかし、近年は就農希望者の減少と離農が進み、産地維持のために新たな生産者の確保が求められている。一方、水田農業維持を目的に設立された集落営農法人では高収益野菜を経営に取り込むにあたり、地域の女性をはじめとした労力を活かして経営安定を図る動きがみられ始めた。</p> <p>このような状況のなか、平成 26 年に日南町白谷集落で設立された（農）ファーム白谷は、水田の圃場整備をきっかけにトマトと白ネギの導入を決定し、令和 3 年度から 10.5a でトマト栽培を本格的に開始した。</p>
普及活動の課題・目標	<p>法人内においてトマト栽培担当に抜擢された女性達は栽培経験が全くなかったため、大規模栽培開始前に基本技術の習得が必要なことは明確であった。また、10.5a の大面積を管理するにあたり、女性達の人員管理及び適正配置による効率的な作業の実現にも配慮する必要があった。</p> <p>機械操作をはじめとした複雑な作業や力仕事は男性の担当となりがちであるが、できる限り女性達自身が行うよう誘導し、自立及び活躍推進につなげる支援を心がけ、今後、集落営農法人等で野菜栽培の推進を図るうえでモデル事例としての波及効果につなげる。</p>
普及活動内容	<p>1 大規模栽培に向けた技術習得 (R1～R2)</p> <p>技術習得を進めるために地域内の遊休ハウス 2.4a を利用して、6 名の女性に対して 2 か年にわたり栽培研修を行った。1 年目は栽培指針に準じて一連の作業方法の理解を進めることに専念し、部会主催の栽培指導会や町内の生産農家を独自に訪問することで作業の方法を見聞きするよう誘導した。2 年目は前年の反省を基に栽培方法の改善に努めながら、適期の管理作業の実施、病害防除の徹底等を指導してレベルアップを図るとともに、令和 3 年の規模拡大をイメージした効率的な作業の実施を呼びかけた。</p> <p>2 女性参画の促進と定着 (R3～4)</p> <p>栽培管理担当の女性は合計 11 名となり、栽培責任者もこの中から任命されたのを受け、1 月に普及所が栽培講習会を開催した。作付け後は 10.5a の新設ハウスでの栽培において自主的な管理を啓発し、作業の進捗を確認しながら週 1 回の頻度で責任者を通じた指導を心がけた。人員配分についても適正化をすすめ、効率的で無駄のない作業となるよう支援した。また、栽培上の要となる養液管理、かん水管理、病害虫管理についてはこまめに指導を実施して自立を促した。</p>
普及活動の成果	<p>1 大規模栽培に向けた技術習得 (R1～R2)</p> <p>1 年目は不慣れながら定植準備を行った結果、設置した通路が狭く、その後の管理作業に支障をきたす場面がみられたものの、2 年目は反省を基に改善につなげることができた。</p> <p>定植、誘引、芽かき、トマトトーン散布等の作業は JA の栽培指針や普及所が定期発行する栽培技術情報誌「日南トマトン情報」を熟読し、ごこちないながら的確にすすめるようになった。農薬散布や養液土耕装置を使った作業はすべて男性の手にゆだねていたため、繁忙期以降は防除遅れから病害の蔓延や草勢の弱勢化を招いた。普及所は病害診断と農薬の提案、追肥量、養液施用間隔の調整及び葉面散布による草勢管理法などを指導し、徐々に栽培技術の理解を深めた。</p> <p>2 女性参画の促進と定着 (R3～4)</p> <p>令和 3 年度にトマト栽培責任者となった女性は、技術面に自信がなく、作業実施に当たっての不安ごとは積極的に普及所の指導を仰ぐよう心がけた。しかし、作業員の大半もトマト栽培経験がほぼなかったため作業に戸惑いを生じる場面が多かった。そこで、複雑な作業の方法については、普及員が解説しながら指導する様子をスマートフォンで動画撮影して他の構成員への周知に活用するなど、女性独自の目線で不安を克服するようになった。養液土耕装置の操作は男性の手にゆだねていたが、手順を詳細に記録しておき、翌年以降に自立できるよう準備を進めた。栽培終了後に行った反省会において栽培チェックシートで個々の熟練度を確認した結果は、十分な技術習得ができたとは言えない状態だったが、参加者は「一人で作業するのはまだ無理だが、全員で協力して確認しながらやれば問題なくできる」として結束を強めた。</p>

令和4年度は栽培開始当初から養液土耕装置の操作を女性のみで行い、農薬散布、葉面散布、圃場外の草刈り作業等も習得しながら作業することができた。一方で、トラクターによる耕耘と畝立て管理機の操作のみは農閑期に男性が行う体制が整った。現在は、法人全体の経営にも注意を払う余裕が生まれ、人員の適正配置と作業時間の削減にも取り組み始めている。

このように、女性自らが栽培上の不安を一つ一つ解消し、的確な作業や積極的な技術習得に取り組んだ結果、作業員同士の協力体制はより強固となり、トマトづくりにやりがいを感じ自然と笑顔が生まれるようになり、法人にトマト栽培が定着するとともに女性活躍の場が生まれた。

令和3年度作は反収 10.3t（部会内順位：48 経営体中 11 位）を達成し、自立する体制が整った令和4年度は反収 8.9t（部会内順位：43 経営体中 17 位）と成績を落としたものの、日々の作業を綴った「トマト日誌」を普及所と1部ずつ共有することで問題点と改善対策の提案に役立っており、次年度の躍進を目指して今冬の反省会の開催を計画している。



部会指導会への積極的参加



栽培中に数々の問題が発生



トマトの生育状況



トマト栽培担当の女性を中心に笑顔があふれる

具体的な  
データ・  
写真 等



(農)ファーム白谷のトマト栽培実績の推移

年度	面積 (a)	出荷量 (ケース)	販売額 (円)	反収 (t/10a)	町平均反収 (t/10a)
R1	2.4	472	668,586	7.8	8.2
R2	2.4	496	716,811	8.3	8.3
R3	10.5	2727	3,490,047	10.5	9.3
R4	10.5	2331	3,074,197	8.9	9.6

残された  
課題

- さらなる効率化推進と反収の増加  
栽培の振り返り、問題点の抽出と改善策等を提案しながら、町内でも上位となる反収の実現に向けて技術水準のレベルアップを図りつつ、効率化と収益増を支援する必要がある。
- 圃場整備事業目標の達成支援  
事業目標となっている白ネギの導入に関しては、地域内の未活用労力の分析を進めて適正な面積での栽培を支援するほか、中山間地域営農ネットワーク協議会の就農相談会への積極参加等により若手研修生等の法人への取り込みを図る必要がある。
- 他の集落営農組織への波及  
中山間地のモデル事例として水稻中心の経営体を対象に野菜栽培の導入を推進するよう経営分析を実施する必要がある。